

二松学舎大学人文学会 第一二七回大会 要旨

二松学舎大学人文学会第 127 回大会

◆日 時 2023 年 12 月 9 日 (土) 12:50～ (開場 12:30)

◆開催方式 対面

◆会 場 研究発表：二松学舎大学 九段キャンパス 1 号館 2 階 201 教室

講演：二松学舎大学 九段キャンパス 1 号館 B2 階中州記念講堂

◆備 考 事前申し込み不要・参加費無料

◆プログラム

12:50 開会挨拶

13:00～15:00 研究発表 (各 30 分(発表 20 分、質疑応答 10 分))

慶安四年版本『発心集』卷四第一〇話考

二松学舎大学大学院文学研究科国文学専攻 博士前期課程 1 年 笥 さくら

「少女」と「馬賊」——『満韓ところどころ』が生成する「満洲」

二松学舎大学大学院文学研究科国文学専攻 博士後期課程 1 年 王 風

「首が落ちた話」から見る宣伝戦

二松学舎大学大学院文学研究科国文学専攻 博士後期課程 3 年 王 学勤

『管子』篇目伝世小考

二松学舎大学大学院文学研究科中国学専攻 博士後期課程 3 年 有永 真瑞

15:00～15:20 休 憩

15:20～17:30 講 演

「琴学」を奏でる——文人たちの抵抗の系譜

神戸大学大学院人文学研究科講師 早川 太基

17:50 閉会挨拶

【研究発表要旨】

慶安四年版本『癸心集』巻四第一〇話考

文学研究科国文学専攻 博士前期課程一年 筧 さくら

『癸心集』は、鴨長明が癸心の機縁となる話を集めた仏教説話集である。その性格上、収載話の大半を仏教者の往生譚や高德譚が占めるが、諸本を通覧すると合計五話の神明説話が確認できる。

特に流布本系統に唯一の神明説話である、巻四第一〇話「日吉ノ社ニ詣ル僧死人ヲ取り棄ル事」は、日吉社に百日詣をする僧が遺体の葬送に関わり穢れを得るが、のちに日吉社の神に赦される話である。中世神明説話において神が穢れを赦す話はまま見られ、先行研究でも収載理由に関する論考は多い。しかし、伝染する穢れを記す話は作品中本話のみで、これに注目した論者はいない。

本発表では、これまでの研究で行われてこなかった巻二第四話、巻五第一四話、および他作品の内容が類似する話との比較を行い、『癸心集』収載話における「死の穢れ」の様相と記述を検討する。調査対象としては、流布本系統からより古態を留めるとされる慶安四年版本を取り上げる。『癸心集』各話には主題に基づいた構成要素の取捨選択が見受けられ、巻四第一〇話の主眼は「穢れを赦す神」にある。よって、他話で欠いている穢れの伝染が記されたのである。

「少女」と「馬賊」——『満韓ところどころ』が生成する「満洲」

文学研究科国文学専攻 博士後期課程一年 王 風

一九〇九年九月から十月、約一ヶ月半の日程で、夏目漱石は中国東北地方と朝鮮を旅行した。漱石が帰国した十月二十一日から十二月三十日まで、その旅行の紀行文『満韓ところどころ』（以下『満韓』）が東京と大阪の『朝日新聞』に五十一回にわたって断続的に掲載された。その紀行文の作成過程について、連載中断や語られない韓国などの問題をめぐって、断片的な指摘は先行研究にすでにある。しかし、旅行中に書かれた日記と『満韓』とを細かく比較対照することはまだ十分になされていない。

本発表はまず、『満韓』の各章とその素材となっている日記の記述とを一日ずつ照合し、日記から『満韓』へと「転写」される中で人物について修正が行われていることに注目する。とりわけ、日記に記されていないが、『満韓』の本文で印象深い存在になっているのが「少女」と「馬賊」とである。異国情緒とセクシュアリティとをまとった「少女」と、日本人に敵意を持つ暴力の象徴である「馬賊」との二つが、『満韓』における「満洲」という「冒険者の楽園」というイメージの生成に機能していることを明らかにしたい。

さらに、私的文献である日記から、公的な性格を持つ新聞連載へと表現の場が移る過程に現れた作者と編集者との植民地趣味を指摘したい。

「首が落ちた話」から見る宣伝戦

文学研究科国文学専攻 博士後期課程三年 王 学勤

芥川龍之介「首が落ちた話」は一九一八年一月一日発行の『新潮』に掲載され、次年に『傀儡師』に収録された。このテキストは、『聊斎志異』所収の「諸城某甲」から題材を得たものである。先行研究では、主に作品に含まれている反戦思想と芥川の人間性に対する認識という二つの方向からの検討が盛んである。

「首が落ちた話」の舞台は遼東である。日清戦争の兵士である何小二是戦いの最中、日本の騎兵に首を切られ、瀕死の状態であった。何小二是日本の軍医の救護を受けて生還する。テキスト中で、日本人が何小二を「柔順なやつ」と称美する点は、多くの研究者に批判されている。

「首が落ちた話」は、何小二のような戦争に巻き込まれた庶民の不幸への同情を描いたテキストではあるが、日本と中国の対立関係に踏み込もうとはしない。この理由について言及した先行研究は僅少である。今回の発表では、日清戦争の時期の両国間の宣伝戦に遡り、この宣伝戦が「首が落ちた話」にどのような影響を与えたのかについて検討したい。

『管子』篇目伝世小考

文学研究科中国学専攻 博士後期課程三年 有永 真瑞

『管子』は、全八十六篇から成る先秦諸子の思想書である。この書については、おおよそ先秦から漢初にかけて原型が成立したと見るのが研究史上の通説とされているが、その根拠として考えられているのは、前漢において劉向の校書により八十六篇に整理されたとされるものと現行本『管子』の篇の総数と同一であることによる。

一方で、その後の『管子』の伝承状況を鑑みると、この八十六篇のそれぞれの篇目や名称に関する状況を伝えているものは、検討を要するものが数多く残されていることが伺える。

そのため、本発表では、秦末漢初から劉向校書までの『管子』に関する記載を確認した上で、その後の『管子』の引用状況や篇目を考察し、宋本『管子』までの間に如何にして『管子』が伝承され、それぞれの篇目の当該時代における内容はどこまでが確定したものとして扱えるのかということについて精査してみたい。